

# リオデジャネイロオリンピックを ZIKA ウイルス日本への流入の契機としないために ＜「ジカウイルス病シンポジウム」(2016年7月9日開催) サマリーシート＞

慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所  
「グローバルヘルスセキュリティ向上に向けての NTDs 等の熱帯稀少病の  
グローバルヘルスリスクの分析とその対策プロジェクト」

## ＜1＞ ブラジルの公衆衛生の現状と ZIKA (ジカ熱) 対策

ブラジルにおいては、貧富の差が著しく、衛生状態もこれに従って、貧富の間で差が存在する。ZIKA はブラジルにとっても大きな問題であり、蚊対策が行われているが、これのみでは ZIKA を防げる状況にない。公衆衛生対策のさらなる推進が求められており、これに向かって国全体が動きつつある。

訪問者においては、公衆衛生対策が十分でない可能性があることに留意し、自身の公衆衛生対策を充実させることが必要である。

ZIKA については、ワクチンも治療薬も存在しないので、蚊の対策と公衆衛生対策の両面の対応が必要である。

## ＜2＞ ZIKA の診断

ZIKA の迅速診断は開発途上にあり、実質的には確定診断が行えない状況である。ZIKA 感染者において、無症状感染者が 8 割存在すること、及び、症状としては、デング熱、黄熱病など似た症状の病気があることから、蚊に刺されて、症状がなくても安心してはいけない。また、精液に長い期間ウイルスが排出されることから、蚊に刺された場合は長期間性交を慎まなければならない。帰国後、感染者が蚊に刺されることにより、日本の蚊を汚染する可能性があることから、帰国後も蚊に刺されないように注意すべきである。

## ＜3＞ 蚊の対策

ZIKA を媒介する蚊は、大きく分けて、ネッタイシマカとヒトスジシマカの 2 種類である。このうち、ヒトスジシマカは徐々に生息範囲を世界中に広げてきており、日本にも普通に生息している。いわゆるヤブ蚊といわれる蚊である。Z I K A は媒介する蚊の種類を変えながら、世界に広まってきており、これにより、ZIKA の病原性が高くなっている可能性がある。蚊に対しては、ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤が使用されるが、蚊に薬剤耐性が現れており、見た目ほど駆除効果はない。現在ブラジルで流行している ZIKA はアジア型のウイルスであり、ヤップ島から東南アジアを經由してブラジルに入ったものと思われる。また、デング熱感染者が ZIKA に感染した場合に小頭症が出やすい可能性があるため、重感染には十分に注意すべきである。

## ＜4＞ ワクチン開発

ZIKA が小頭症の原因になると言われていることから、ワクチンとしては、弱毒化ワクチンよりも、不活化ワクチンを開発せざるを得ない。現在、日本脳炎ワクチンを開発した技術を応用して、不活化ワクチンの製造に取り組んでいる。目処は立っているが、実際の上市は 10 年ぐらい先にならざるを得ない。

以上のことから、リオデジャネイロオリンピックを前にして、次のことに留意すべきである。

1. ワクチン、治療薬ともに存在せず、治療法がない以上、蚊に吸血されないように心がけることが重要である。
2. 無症状でも、感染している可能性があるため、蚊に刺された場合は、帰国後、感染を広げるような行為は避けるべきである。
3. ヒトスジシマカは日本にも生息しているため、日本においても十分な蚊対策を行うべきである。

以上

＜制作＞ 慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所ジカウイルス病シンポジウム事務局

＜協力＞ 建野正毅、安田二郎、小林睦生、横手公幸、天野修司、宮田善之、竹内勤、青木節子